

Ⅳ 退官にあたって

久保田 競（行動発現分野）

京都大学の取り決めにより、満63歳をすぎた平成8年に、31年勤めた京都大学を辞することになった。辞することは事前に解っていることだったので、ある程度、身の辺りを整理していたが、辞して半年近くなるのにまだ片付かず、実は困っている。

辞めてもサルでの研究を続けたいと思った。年をとって、研究能力は間違いなく低下しているが、人並みに出来る力はあると思った。定年退職の制度がなくなったアメリカの大学や研究所にいる友人は、70歳位でも元気に研究を続けている。自分にも出来ると思った。霊長研の創立とともに犬山にやって来て、研究室をつくり、研究を続けて来た。その時の苦勞にくらべれば、大したことはないと思った。それがそうでなく大変なことが、辞めてやっと解って来た。

必要なだけの研究費があり、研究協力者がいて、秘書、技術職員や学生がいて、毎日、楽しく研究をやって来れた。辞める直前には所長職として、いやなこともあったが、研究はやって来れた。

この研究をやるシステムがなくなると、ほとんど研究が出来ないのである。

毎日、郵便物やe-mail 来るが、自分で処理しなければならない。開封するのに時間がかかり、読むのに時間がかかる。返事を出すのにまた時間がかかる。封筒を用意し、あて先を書き、切手を買ってきてはる。これがスムーズに出来ない。電話の応対がうまく行かない。欲しい文献を手に入れない。今まで、まわりの人達が助けてくれたので支障はなかった。若い研究者の誰もが自分でしていることを自分でしないでいて、辞めて

始めることがいかに難しいことか、体験して解った。研究を続けようという意欲を失わせるに充分で、毎日毎日自分の実力にあき返っている。研究所は、研究をやりやすいように創ってあったなあと、しみじみ思っている。

うちひしがれてはいるが、研究を続けようという意欲は、まだ持っている。しかし、いつ新しい研究が出来るか、わからない。毎日毎日の生活が研究能力を失わせつつある。

辞める時に、研究も止め、一切を整理した方が、すっきりして良かった。

辞めても、科学研究費をもらっている。これが続いている間は、コザルでの研究を続け、きりの良い時までやり遂げたい。しばらくは研究所で研究を継続させていただきたい。

辞めて年金生活となった。辞めると、時間がたつぷりと出来て、好きなことが出来る。今まででやらないで我慢していたこと、気ままにやりたいと思っていたことがいろいろある。それが出来ないことに気付いた。

2カ月に1回、年金が銀行口座に振り込まれるが、これだけで、働かないで、気ままに暮らすのは無理だ。自分の家があるから、家賃やローンを払わなくて良い（これらは退職金で片付いた）し、衣食は足りる。しかし、車をもって、家に電話をつけ、クーラーをつけ、普通に（快適に？）暮らそうとすると、年金分位は稼がなくてはならない。稼ぐと、年金が減るようになっているから、気ままな年金生活は無理である。退職してからの収入については、充分準備しておかれることをおすすめ

めする。退職してからでは間に合わない。

霊長研を辞めて、日本福祉大学へ勤めることにした。私学で学部学生とつき合うことは今までといろいろと違う。学生の払う授業料で、何事も行うということは、今までの生活とはいろいろと違い、とまどうことが多い。講義を一年中することは、意外と大変なことなんだと実感している。

私は医学部を卒業して医師免許を取ってある。医師として働きたいという気持ちは常にもっていた。大学院学生の頃には、医師のアルバイトが出来たが、公務員となってからは、兼職として出来ないことはないが、研究に専念したかったので、医師としては働かなかった。私立大学の職員になると兼職の制約がないので、自由に出来る。保険診療の出来る資格を取り、ある病院で、神経学一

神経内科の医師として働き出した。外来で患者を診察、診断、治療をする。これも、これまでしてなかったもので、大変だが、まわりの医師のやり方を見たり、聞いたり、勉強したりで、始めた。臨床の学会へも入会した。サルでの研究と同様に面白いことがいろいろとある。学会発表もする。昔からの知り合いの友人は教科書を書いたり、院長になったり、教授になったりしている。解らないことは気軽に教えてもらえる。このことが、これからの研究（サルを使う積もり）の障害にならないようにしたい。

定年退官した後、感じていることを羅列した。
参考にしてもらえることもあると思って書いた。

（平成8年5月28日）